

井ノ木

脚本作家: Laurenz Lukele

ルケル・マウラニ

v.1.2.

登場人物は全員、日本語を話す。へレーネのみフランス語。

東京の広々としたアパート。夜、カメラは背景をぼかしながら
ピントはすでに正面に現れる何かに合わせられている。(35mm)

登場人物 不見子(ふみこ)、半助(はんすけ)、へレーネ、
戸津谷(とつや)、孝二(こうじ)

テキスト: a film by Laurenz Lukele

左からソファに横たわる足が現れる。カメラを左へパンすると、顔が現れる。とてもシンプルでゆったりとした服を着た日本人女性だ。顔は青白く、表情はない。彼女は岩のようにかたまり、カメラを直視している。ナレーションが始まる(幽霊の口は動いていない)。

幽霊：「私は死んだ。このところずっとね。」

広角でアパートに横たわる幽霊を撮影。アパートには本やゴミが散らかり、明らかに若い男のアパートとわかる。

幽霊：「でも私は何者なのか？」

アパート、昼間。テレビではくだらないゲーム番組が流れている。若い男がテレビの前に座り、インスタントラーメンを食べ、ビールを飲んでいる。幽霊はクローゼットの中に隠れ、半分だけ顔を覗かせている。彼女はテレビを見つめている。(テレビのクローズアップ、食べている男の口のクローズアップ、幽霊を背景にし・アメリカン・セットアップをポートレート)。

幽霊：「自分が死んだことは知っているが、自分が何者であったかは覚えていない。いや、むしろ、どんなものだったのだろうか。」

幽霊 POV：クローゼットの中のゴーストを写してから、幽霊視点の男
(ゴースト、そしてドア越しの男)

幽霊：「何をしているかは理解できないが、これは私に似ている。しばらく観察していてようやく何が必要か学ぶことができた。座って箱や紙切れを眺めることに喜びを見出しているようだ。それしかできないんだ。最初は、どうやって動くのかさえ理解でき

なかったが、見れば見るほど思い出してくる。」

男（半助）がキッチンに行こうと部屋を出ると、幽霊がクローゼットから歩き出し、テレビを見つめる。彼女の顔には徐々に喜びの表情が浮かび始める。タイトルがフェードインすると、栄光と勝利の音楽が聞こえてくる。タイトルがフェードインする。（カメラは彼女の顔をクローズアップ）。

タイトル：Tethered キズナ

夜。寝室。ゴーストは前に進もうとする。幼児のように慎重に小さなステップを踏み、倒れる。

幽霊：「まず、それらしく動こうとした。」

キッチン

幽霊：「次に、時間をつぶすために、人間と同じようにページをじっと見てみた。」

（本と幽霊を上から見下ろし、次に静止した顔を写す 35mm）

寝室

幽霊：「それからもちろん、私は箱を見て夢中になった。時が経つにつれ、私は人間についての基本的なことを理解し始めた。彼らは食べ、眠り、他の人々に会う。この人間に客は少ないようだが。たまに女の人に来るが彼らはお互いのところが好きらしい。」（そのシーンでセックスしている）すごくね。）

キッチン

窓から外を眺め、新聞の中の興味深そうなページに目を通す半助のコラージュ。植木に水をやり、食事の支度をし、ゴミを出す。ニュースレターを読みながら、彼はクローゼットをちらつと見る。その表情は、何かを不快に思っていて、それを遮断しようとしている。

寝室

幽霊がテレビを見ている。幽霊はテレビの内容に息を呑み、ある生々しい感情の瞬間に思わず隣のグラスをひっくり返し、飲み物をこぼす。隣のキッチンで本を読んでいた男は、その音を聞きつけ調べに来る。一方、幽霊は半助の顔を見る。

幽霊：「周囲と交流できるときもある。でも、いつもではない。なぜものに触ることができ
るのか、まだわかっていないし、そういう時は、いつも気が散ってしまう。」

幽霊が開いた本を見ている間、男は眠っている。

幽霊：「私はいつも、彼が本を閉じ忘れたり、テレビをつけっぱなしにして寝たりするの
を待つ。これまでのところ、私は人間についてかなり多くのことを学んだ。何かを
成し遂げるために挑戦したり、食べ物についてもよく話す。生き残るために必要な
行為に喜びを見出そうとしている。あるいは限られた時間が怖いのかもしれない。
もしかしたら私のことが怖いのか.....あるいは、私のようになるのが怖いのかもし
れない。」

幽霊は全学連の学生のチラシを見ている。半助は何らかの関係者の（だった）ようだ。

幽霊：「人は仕切ることも好きだ。自分の価値観を確信しそれに伴って行動する限りは、
他人を傷つけたとしても気にしない。その後、戦いの結果に見合わない多くの犠牲を
出すまで他の他人が反撃する。そして全てが終わった時、彼らは言葉で癒そうとする。
そもそも最初から言葉で解決策を見つけないべきではないだろうか？でも言葉は平和
より安らぎを効率よくもたらすのかもしれない。それは誰にもわからない。」

幽霊：「人間のことを考えれば考えるほど、自分がどんな人だったかを考えてしまう。でき
るだけ自分の人生を思い出そうとしてもそれは断片的なエピソードとしてしか現れ
ない。」

幽霊の生前。買い物をして街を歩いているときに、不見子は一人の男に出くわす。

男：「お姉さん、ちょっと時間ありますか？」

不見子：「ああ、ちょっと聞いてくれる？もう最悪な一日だったの。携帯を家に忘れたと思
ったらバッグに入ってたし、お母さんから彼氏だの結婚だのを電話で聞かされて。
おまけに四件も花屋を回ったのに欲しい花がなくて。私は...」

男：「ああ、もう大丈夫です...」

男は背を向けて歩き出す。不見子はしばらく彼を見つめ、中指を立てる。

不見子：「ただ『ちよっと時間ある』って聞いたかっただけ？はあ…」

不見子も振り返って歩き始める。

アパートに到着。カメラは階段の上から。

不見子はドアを開け、靴を脱ぐ。階段をのぼりリビングの窓を開ける。そこには料理を作っている彼氏の孝二がいる。

不見子：「ただいま！」

孝二：「ああ、帰って来てたんだ」（驚いて）

不見子：「私の足音聞こえなかった？階段古くてはあちゃんでも聞こえるくらいギシギシいうのに」

孝二：「でも、今料理してるんだよ！」

不見子は食料をテーブルの上に置き、孝二の肩越しに料理を美味しそうに見つめる。

不見子：「はい！これ！」（花を渡す）

不見子は花を渡すが孝二からの反応はない。不見子は花を一旦テーブルの上に置き、また孝二の肩越しに料理を物欲しそうに見つめる。

不見子：「めっちゃ美味しそう！いい匂い！」

孝二：「二人分はないよ」

不見子：「あ・・・」

孝二：「もっと遅いと思ってたから、こんなに早く帰ってくるとは思ってたよ。」

不見子：「いや、メッセージ(LINE)送ったつもりだったんだけど・・・」

孝二：「またそれかよ！」

不見子：「・・・わかった・・・」 （ごめん）

不見子は寝室へ向かう。テレビをつけて首を左右にのばす。

不見子：「**私**どうしても読みたい本があつて。二重生活を送っている女性の話らしいんだけど、彼女は中野に大好きな彼氏がいて、よく出かけるし将来は一緒に暮らすつもりみたい。で、彼は知らないんだけど、実はその女はお金をもらうために男を殺しててノワール映画の典型的なファム・ファタルなの。きっとその彼氏は落ちこぼれなんだろうな。時々こういう物語でステレオタイプに落とし込まれていく男性視点が恋しくなるんだよね。もしかしたら人はそういう弱さに強さを見出すのかな。ねえ、聞いている？」

不見子はがっかりしてテレビを見つめる。窓に目をやり、開けてバルコニーに出る。床に座り、バルコニーの手すりに寄りかかりながら、両手で鉄格子を握りしめ、まるで監禁されているかのような表情を浮かべる。彼女は目を閉じ、日光浴を楽しむと腰を下ろし雲を眺める。カメラが遠ざかり、戻ってくると現在に戻る。

バルコニー

半助が前のシーンの不見子と同じ場所に座っている。バルコニーに固定されたケーブルの上に洗濯物が干してある。落ち着いた様子で通りを眺めていると、彼女のへしーネが出てくる。隣に座ると二人は抱き合う。

へしーネ：「**日黒**の映画館でこれを観たの。5ヶ月間の韓国での出張から戻ってきた男の話だった。帰ってきて奥さんに会った瞬間、彼は何かがおかしいことにすぐに気づくんだけど、アパートがやけに男っぽい匂いで浮気したんじゃないかって彼は思うの。わかるでしょ、あの体育後の更衣室に漂う安っぽい制汗剤の匂い。男は最初、そのことを問いただそうとしたんだけど、逆にそれが彼を興奮させて・・・変態的な意味とか面白い意味じゃなくて！ただ独占欲が強くて嫉妬心を煽られるのが好きみたいなの。

自分を惨めに見せるなんてすごい意地悪いよね。とにかく、その興奮は次第に強迫観念に変わって男は奥さんの温かさみたいなものを否定するようになる。そして最後に彼は耐えきれず彼女をバスタブに溺れさせるの。そんなの想像できる？でも一番最悪だったのは彼女のしたいとレイプするシーンでほんとに見てられなかった。(ポーズ)

なんでいつも映画の中では女性が欲望を表現すると、罰を受け、あるいは威厳のない男性よりひどい女性が描かれるのかな。まるで被害者と加害者っていう二つの領域でしか存在できないみたい。現実はずっとマシだとおもいたいけど。でも結局はこれは女性より男性のことを物語っていると思う。男が気持ちを伝えないせいでそれが呪いになってしまうことを憐んでいるのかも。」

半助：「俺結構そういう映画好きだけど。観に行こうよ。」

へレーネがふざけながら半助の腰をペンすする。

へレーネ：「このペカー！」（笑いながら）

半助：「そういえば、渡したいものがあるんだ。」

へレーネ：「ほんとに？」

半助：「うん。」

へレーネ：「見せて！」

アパートメント。へレーネと半助は窓から室内に入る。キッチンへ向かう。

へレーネ：「私たちって、男たちが殴り合うところを女がお金をかけて観るっていう映画作らない？想像してみて、私が端に立ってナチョスを食べながら観戦するの。」（洗練された声で）「『そうそう、この角度は彼のお尻に最大限の力を入れるときに最適なんだ。よし！いけ！』ってね。」

半助がへレーネにプレゼントを渡す。

半助：「全く誰が意地悪いんだか。」

へレーネ：「女の子は夢みがちなの。（微笑みながら）これ何？」

半助：「開けてみて」。

へレーネは箱を開ける。何が入っているかは見えない。へレーネは愕然とする。

ヘレーネ：「うそ！！」

半助：「ほんとだよ」

ヘレーネが半助にハグする。

ヘレーネ：「信じられない！あなたは」

ヘレーネは階段を駆け上がり、反対側から窓を開ける。

半助：「何してるの？」

ヘレーネ：「見ての通り準備しているの。これが私にとってどういう意味かわかる？買い物に行って、ああ、あとトレス・クリーニングに出さなきゃ！全部完璧にしないと！あなたは女の子を幸せにするのが上手ね！」

半助：「それは君が幸せの感覚を俺に教えてくれたからだよ。」

二人は愛し合うように見つめ合い、そしてヘレーネはその場から逃げるように離れる。

ヘレーネ：「おっけい・・・急がないと・・・また後でね！」

ヘレーネは階段を駆け下り、靴を履く。最後にもう一度顔をあげ、興奮したような静かな悲鳴をあげ、アパートを後にする。ドアを閉めた後、同じカメラアングルでトランジション。幽霊が入り口に立ち、見上げている。キッチンから半助が料理をする音が聞こえる。広角のショットで不見子がガラス越しに見ているのがわかる。

幽霊不見子：「いい匂い！」

不見子はそう言いながらガラスに触れると、それがグラつき始める。半助はその音に気づき、ガスを止めガラスに近づく。不見子はもしかしたら彼と触れ合えるかとも思いガラスを押しつづける。同じフレームで半助視点になるが、ガラスの向こうには誰もいない。ただ窓は揺れ続けている。半助は窓をあげ、階下をみるが、そこには暗闇しかない。彼は再び窓を閉める。

半助：「なんだよ今の！クソ怖かった！」

幽霊不見子：「そう？自分では説明できないことが怖い？それとも理解できないことを受け入れるのが怖い？だから人間は何度も何度も同じ戦争を繰り返すのか？相手に対する恐怖を乗り越えられないから？生物学的なものなのか？それとも単に、実際の世界よりも簡単な解釈の方が怖くないから？今、彼は風のせいだと思っているかもしれない。彼はそこまで考えているのだろうか？」

幽霊はドアを開け、ゆっくりと半助の背後へと動く。

半助はグラスを拭き、光に当てて確認している。不見子の反射が見える。半助は恐る恐る振り向くが不見子はいない。彼女は半助の目の前に立っている。

幽霊不見子：「ここが彼の子供っぽいところね。まるで生々しい感情が本当の彼を引き出したみたい。喜びに例えたとしたら、コントロールできないなにかを受け入れること。いやそんなことが出来るだろうか？人は幸せでいることも避けているのかもしれない。そしたら、悲しみと喜びの違いは何だろうか？」

バー。ヘレーネと半助のデート。

半助：…だから、彼が植物に間違った土を買っているところを見つめることしかできなかった。俺はどうしたらいいのか分かんなくて、ただ立ち尽くしてた。時々、そんな気持ちになることある？わかるだろ？全然気にならないはずのことが、気になるんだ！」

ヘレーネ：「うん」（愛らしそうに半助の目を見ている）

半助：「あと俺のアパートも。なんでもかはわかんないけど、どんなに天気が良くても必ずドアの前に濡れたシミがあるんだよ。マジでびっくりするよ。」

ヘレーネ：「今日は一晩中あなたの話が聞けるよ。」

半助：「夜、家に帰る途中、街灯の光を反射して地面がキラキラするんだけど、それが想像を絶するくらい美しいんだよ。まるで夢のようにね。それを見ると、どこか神聖な場所に続くようで俺の思考は消える。でも、玄関に着くと、ドアの前に濡れたシミがある。引越してきて以来、ずっとそこにあるんだ。毎回毎回、動揺して思い出すんだ。」

ヘレーネ：「何を？」

半助：「すべての人がピカピカの道を歩けるわけではない。どんなに頑張っても、決して消えないシミがある。どんなに頻繁に掃除してもね。」

へレーネ：「しっかりしてよ！あなたは周りの人たちに優しさと敬意だけを持って接している心のいい人じゃない。シミはあなたを支えているものだと思う。たとえあなたが完全に打ちのめされていて、自分の足跡をたどり、転ばないように小さな一歩一歩を踏み出すことしかできなくても、濡れた場所がそこにあることを知っているからこそ、自分のアパートを正確に見つけることができるの。他の人は、星の中で迷ってしまうけどね。」

半助：「そうかもね」（微笑みながら）

へレーネ：「そうよ！だから虚無的にならないで。」

半助：「うん．．．だけど．．．どちらも信じ難いな。」

へレーネ：「じゃあなんで引っ越さないの？そんなに酷いなら．．．」

半助：「だってこのアパートのために一生懸命働いてきたから。今は別の場所を探す気力がない。まあいつかは．．．。」

へレーネ：「そう．．．いつかね。もしその時になったら一緒に探そう！」

彼らは手を取り合う。へレーネは考えが薄れ、少し気が散ったように見える。

へレーネ：「今の私の夢はそれね。」

家へ帰る道。夜。

へレーネ：「今日楽しかった！」

半助：「入らないの？」

へレーネ：「明日朝早く起きなきゃいけないの。あなたといたらいつも夜更かししちゃうでしょ。」

半助：「確かに。じゃあ、気をつけてね。」

へレーネが歩き始める。

半助：「俺も楽しかった！」

へレーネは夜の闇の中に消える。半助は再びシャツの一部を出す。

半助（モノローグ）：「この時以来、へレーネに会っていない。彼女は俺の人生から消えてしまった。まるで存在自体が消えてしまったかのように。」

半助がアパートに入ると、カメラは床を見下ろし、まだそこにある濡れたシミを写す。

建物と人々の都市のコラージュ。

半助（モノローグ）：「へレーネを責めることはできない。時々、二人が食い違っているように感じたこともある。変な言い方だけど、そのおかげで俺たちはいいカップルになれたと思う。お互いの違いを尊重し関係を良くしようと努力することができた。今まで経験したことないユニークな愛だった。だからこそ彼女を失ったことを受け入れるのは難しい。共通の将来、結婚、子供など、以前は想像もしなかったようなことを考えさせられる人がいると、もしかしたら人生と一緒に過ごせる人を見つけたかもしれないと期待し始める。そしてまた現実が襲ってくると、耐えられなくなる。でも、彼女と過ごせた時間にはたくさんの喜びがあったのに、なぜ悲しまなければならないのだろうか？俺たちがうまくいかなかったのは、俺たちの違いのせいだとは思わない。例えば誰になんて言われようと、そのおかげで俺たちはより良く、より強く、より賢くなれたと思うから。だから、ある意味、俺は感謝していると思う。俺は生きていると感じる。そして、何も感じないよりは、むしろ痛みを感じる方がいい。彼女に感謝する機会があればいいのだが・・・。」

公園

へレーネはベンチに座り、悲しそうに虚空を見つめている。右から女性が近づき、隣に座る。女性は少し年上である。二人とも何かを悲しんでいるように見えるが、もう一人の女性の方がへレーネよりうまく対処しているように見える。二人ともしばらく虚空を見つめている。

そして女性は、へレーネがいつもより冷静さを欠いていることを知っていたかのように、へレーネを観察し始める。

女性：「それで、全部準備できたの？」

へレーネ：「ええ、ほとんど。」

女性：「よかった。私、ちょうど仕事を終わらせたとこなの。あと1つで、やっと家族の借金を返せる。」

(沈黙)

女性：「どんどん楽になってくのよ。わかるでしょ。彼らは無作為に人を選ぶしね。自業自得よ。」

まだへレーネは沈黙を続ける

女性：「この人が好きだったんでしょ？そこにいたからわかるわ。」

へレーネは女性を見てまた空虚を見始める。そして半助が言ったことを繰り返す。

へレーネ：「すべての人がピカピカの道を歩けるわけではない。」

女性は微笑みながらへレーネを見ていて、そして立ち上がる。

へレーネ：「多分会うのはこれが最後ね。」

女性：「そうね」

へレーネも立ち上がる

へレーネ：「あなたがいなかったら、こんなに長くは続かなかった。
いろいろありがとう！」

へレーネがお辞儀する

女性：「ただ、これが終わったら、自分から何かを生み出しなさい、ナナ（七）。
ホステスクラブなんかで働いているのを見かけたら、殺すわよ。じゃあね。」

ヘレーヌは、闇の中へ去っていく女性を見送る。

ヘレーヌが自分に言う：約束するわ。

次の日。カメラはベルコニーに。

半助の友人である戸津谷が半助のアパートに近づく。彼の見た目はやんちゃなストリート風、でも同時に素朴なところもある。戸津谷はハワイシャツを着て、サングラスをかけている。アパートに入ると半助は完全に泥酔していて、周囲をビールの空き缶が囲んでいる。

戸津谷：「おい！どうしたんだよこれ」

半助はモゴモゴと聞き取れないように呟く。

戸津谷：「おい！何があつたんだ？」

半助：「彼女が消えたんだよおお！！」（赤ん坊のように泣きながら）

戸津谷：「ずっと付き合ってたあの子か？まじか、それは最悪だな。何かあつたのか？」

半助：「2週間前から音信不通なんだ。」

戸津谷：「音信不通？そんなやつくたばれよ。なんでお前は惨めに床に突っ伏してんだ？
ちよつとは自分に対する敬意つてもものがないのか？」

半助：「自尊心になんの意味があるんだ？俺はもうただ死んでこの不幸を終わらせたいんだ！」

半助がビールを一口飲もうとすると、戸津谷がそれを止める。

戸津谷：「おいもうやめろ！人生はもつとこれからだろ」

半助：「離せよ！」

仲直り後

半助と戸津谷は街角で隣り合って座りお互い何も言わずに長い沈黙があった。

戸津谷：「一緒に歌舞伎町に行こう。ダイはまだ俺に借りがあるから、覚えている？カラオケバーのやつ。行って気を紛らわさない？こんな君を見てらんないし。自分を尊敬できない君をどうやって尊敬できるっていうんだ？情けないぞ、分かってる？」

半助：「分かってるよ・・・」

戸津谷：「冗談だって。そんなふうに自分を責めるな。」

半助：「分かってるけど、でも良くなるには全てを吐き出す必要があるよな？」

戸津谷：「まあ、もちろんそうだけど。でもあんまりやけになるな。」

半助：「あのさ、自分は一人じゃないって感じたことあるか？」

戸津谷：「一度もないよ。男女関係なく周囲の人がいつもそばにいてくれる。」

半助：「だけどその・・・家とかでは一人じゃん？」

戸津谷：「どうした？ベカになったのか？」

半助：「やつぱり忘れて・・・」

半助は起きて歩き出す。

戸津谷：「何かに取り憑かれているのか？」

半助は振り返って、不思議そうな表情を浮かべる。

戸津谷：「やつばなんでもない」

半助：「いやどういう意味？」

戸津谷：「なんというか、今は一人でいないことに取り憑かれているのか？」

半助：「ん？」

戸津谷：「アップルシフトウルーデル・・・」

半助：「んー？」

戸津谷：「アップルシフトウルーデルー！！」

半助：「アップルシフトウルーデル？」

戸津谷：「アップルシフトウルーデルだよー！リング入りのウイーン風ペイでクリーミー、す
こいいうまいんだ。」

半助：「想像するに、それがお前の最近の執着なのか？」

戸津谷：「それを売ってるペン屋がないんだよー！ここ二日間も探してるのにー！」

半助：「何言ってるんだよ。たった二日探したぐらいで執着とは言わないだろ。」

戸津谷：「黙れー時間じゃなくて強度の問題なんだよー政治みたいだね。政党は感情的にな
って色々主張するが、選挙が終わるとすぐに忘れてしまう。執着は原動力から生ま
れるんだ。そう理由からー！」

半助：「じゃあ、お前の理由は？」

戸津谷：「言いたくないけど。でもくだらないことに執着しているのは俺だけじゃないって
分かって安心したよ。」

半助：「別に俺は何にも執着してないけど」

戸津谷：「まあ・・・」

半助と戸津谷は顔を見合わせ笑い始める。

半助：「そういや・・・カラオケって言ったっけ？」

アパート。幽霊

幽霊不見子が当てもなくアパート内を彷徨っている。

不見子：「つまらない…何もかもがつまらない…。本は全部読んだし、テレビ番組もほとんど見た。何か新しいものを見ても、同じ形式で同じことの繰り返し。刺激的な体験は何もない。それは、すべてがすでにやり尽くされていて、すべてが異なる反復を繰り返しているだけだからだろう。人間はそんなに簡単に楽しませられるのか？それとも…。私たちは同じ興味を共有していないだけなのかもしれない。だとしたら、私は何者なのか？私のものではないこの空間に存在しているのは？私は今、自分の人生における人間関係、友人たち、彼らがどのように私を支えてくれたかを思い出し始めた。でも今は、すべてが遠い夢のように思える。それは私が死んだからなのか、それとも遠いからなのか。人間も同じことを経験するのだろうか？物事に対する最初の経験というのは、それなしでは生きていけないと感じるほど強いものだ。しかし、時間が経つにつれて、起こったことをほとんど忘れてしまうようになる。私が大切にしていた本やテレビ番組のように。でも、結局何も重要でなくなるのなら、何かを経験する目的は何だろう？今まで知っていたことすべてに疑問を抱くのか？たぶん私はただここにいて、何もしないほうがいいのかもしれない。すべてが無意味なら、私は無の中に存在することができる。」

テレビに不見子の記憶が映し出される。彼女の髪は濡れ、服を着たままバスタブに座っている。ボーイフレンドが入ってきて、彼女を溺れさせる。その瞬間、カラオケを歌い、酔いつぶれる半助の姿がフラッシュバックする。彼女の動きが止まると、ボーイフレンドが服を脱ぎ始める。カメラが文子の幽霊に切り替わると、彼女の頬を涙が伝う。

不見子：「でも何もしなければ、自分のものでもないアパートで、長い間私の人生を決定づけたこの男の影で、自分の思い通りにならない世界にいることに抵抗しながら生き続けるだけだ。本やテレビ番組が、自分が何者であつたかを理解する手助けをしてくれたのかもしれないが、もうその追体験はしたくない。今なら、これからどうなりたいかを理解しようと思える。」

不見子はアパートの玄関に近づき、ドアを開ける。

これからは映画の実験的な部分：場所や重要なシーンを除いて、すべてのシーンが完全に台本通りというわけではない。

新宿、ストリート、夜：

不見子は現在、四人の異なる俳優によって描かれている（不見子・フニコ1・フニコ2・フニコ3）。カメラは新宿の街を歩くフニコ1を追う。彼女はカラフルなジャケットを着、ジーンズを履き、短めの金髪である。

不見子： 「自分の興味を追求すれば、以前の自分よりもずっと多くのことができるのだと、今は実感している。誰かのことを考える必要もなく。私はいつも街が好きだった…。」

山、森

フニコ2はハイキングウェアを着て森の中を歩いている。

不見子： 「でも、田舎がこんなに美しいとは思わなかった。」

法政キャンパス市ヶ谷

フニコ3は法政大学市ヶ谷キャンパスで、ビッグバックを背負いながら中庭を見回している。

不見子： 「私は今でも世界について学ぶことを楽しんでいる。授業の後、お気に入りのカフェに座る。モカ・ラテを注文し、本に目を通しながら時間を忘れる。ただ今回は、知りたいものは自分で決める。私は自分のこの側面を完全に捨てることはできないのだろう。なぜそうしなければならないのか？ 私は学ぶことが得意なのだ。」

モノローグが続く間、シーンはその二つのバージョンの文子の間で変化する。新宿では、フニコ1は人々（見知らぬ人？友人？）と話し、ビールを飲み（誰かがタバコを勧め、フニコ1はそれを受け取って感謝し、微笑む）、完全に自由で無頓着な気分になる。森の中のフニコ2はビーチに到着し、景色を楽しみ、靴を脱いで足の指の間の砂の感触を楽しみ、大学のフニコ3は大きな塔の窓際に座って東京を眺める。

不見子： 「自分の人生にいつも心地よさを感じていたが、自分が同時にこんなにも多くのものになれるとは想像もしなかった。」本の中のカテゴリや、テレビに映る人の切り抜きのような存在ではなく、自分を信じられるようになった今、やっと自分自身の旅を見つけ始めた気がする。

ベーカーリー、夜、カメラは外に設置

戸津谷はパン屋でアプフェルシュトウル・デールを売っているか尋ねる。半助は外で待っている、二人とも酔っ払っていた。戸津谷はがっかりしてパン屋を後にする。

戸津谷：「ちっ！」

半助：「いずれ見つかるよ！」

戸津谷：「まー」

半助：「さあ、歩き続けよう。」

神田川、夜

戸津谷と半助が川の横を歩いている。二人とも手にはビールを持っている。突然、半助が立ち止まり、戸津谷が振り返る、半助が大声で笑い始めた。

戸津谷：「急にどうしたん？」

半助は笑い続ける。

戸津谷：「おい、ついにあの女のことを忘れたのか？」

半助が突然叫んだ

半助：「そんな風と呼ぶな、この野郎！」

戸津谷：「わかった…いめん…」

半助：「お前が言ったことを考えてみたんだけど…そうだね。俺は少し取り憑かれているようだ。」

半助は川の手すりに寄りかかる。戸津谷もそれに加わる。

半助：「俺のアパートには奇妙な気配がある。引っ越してきて以来、ずっとそこにある。重く、別の人生の重みのように感じる。憂鬱だよ。俺は家に帰るたびに悲しみに打ちひしがれるんだ。そして…変な言い方だけど…。罪悪感もある。」

戸津谷：「何について？」

半助：「わからない。たぶん、昔の自分とか、過去に下した決断のせいだと思う。昔の俺はとても変わっていた。身近な人を傷つけていた。自分は簡単に前に進めたけど…
…もし彼らがそうできなかったら？もし俺がその可能性を奪ってしまったとしたら？」

戸津谷：「お前は本当にベカだな。」

半助：「おい！」

戸津谷：「そらだよ！お前自分で言ったよね、別人だって。俺はお前を知っている。自分自身に対して必要以上に厳しい。確かに、お前はピエアではなかったけど、俺ほどひどいことはできないはずだった。」

半助：「ああ、俺は嫌な奴じゃないからね。」

戸津谷：「その通り！世の中にはお前よりずっと悪い人たちがいる。その中でもお前は変わることができる数少ない人達の一人だ。つまり、俺は以前のお前の方が好きだったけど…。」

半助が戸津谷の腕を殴る

戸津谷：「いたっ！」

半助：「当然の報いだ。」

戸津谷：「まあ…大丈夫だよ、半助！直感でそう思うんだ。あと、俺は決して間違えない。」

一時停止

半助： 「なんせそんなにアプフェルシュトゥルデルに取り憑かれているんだ？」

戸津谷：「言っただろ？お前は俺ほど物事を白無しにすることはできない。」

外観三人のフニコバージョンで風景が切り替わる。フニコ1目は顔が見えない男たちに嫌がらせを受ける。フニコ2は海に落ち、波と格闘する。フニコ3は誰もいない大きな教室に一人で座っている。また、不見子が再びベスタブで溺れるシーンもある。次に、ヘレーネが手袋をはめ、メイクをする。彼女は真剣で、同時に緊張しているようにも見える。

戸津谷：「他人のことを考えなくていいと思うと、素晴らしい気分になる。欲しいものは何でも手に入る。でも、それは同時に、世界のすべてを経験し尽くしたような気分にもなる。自分の喜びに溺れているような。次の高みを追い求めるジャンキーのように。だから、夢中になれる新しいものを見つけなければならない。笑われるかもしれないけど、実は俺たちが出会う何年も前から、自分のパン屋を開くことを真剣に考えていたんだ。アプフェルシュトゥルデルを食べると、昔のことを思い出すんだ。でもね、結局のところ、そうなる運命ではなかったみたい。くそっ、お前のその感情的な戯言に影響されるとは。でもそうだね、たいていの人は本当の幸せなんて味わえないのに、俺は今ここで無駄にしている。」

半助： 「お前は本当に嫌な奴だな！」

両者が笑い出すと、戸津谷が半助の腕を殴る。

戸津谷：「くたばれ、クソ野郎！」

半助：「わかったよ！ちょっと嫌なやつっただけ。」

打ちひしがれているフニコたちが見える。戸津谷と半助は仲良く相撲を取り続けるように戯れる。

スーパ前

ヘレーネは果物売り場でオレンジを選ぶ。

廃線になった鉄道

カメラに向かって廃線跡を走るオリジナルの不見子。彼女は泣いている。ある時点でつまずき、地面に倒れる。彼女の顔は涙で濡れている。顔を上げると、目の前にフミコが立っている。

不見子： 「どうすればここから抜け出せるのか、いまだにわからない。どうすれば、この鎖から解き放たれるの？ 教えて！ 教えてよ」

フミコ 1： 「あなたは何を知っているのですか？ もしかしたら私たちはみんな、あなたの本や番組の影響を受けた人物のバージョンに過ぎないのかもしれない。作家が意図した以外の何者にもなれないはずだった誰か。あなたが私たちのようになれるのは、あなたがすでに別の誰かだからかもしれない。一方、私たちは狭いカテゴリーに閉じこもってしまう。クール、控えめ、一番手... あなたはそのどれでもない。それなのに、もがけばもがくほど、現実の人生とは何の関係もない作り物の箱の中に自分を押し込めてしまう。箱の中にいる方が楽なのに、それでも結局は、何度も何度も同じ問いを自分に投げかけ続けることになる。」

不見子： 「とても不平等だよ... 私が耐えなければならなかった人生！ 私が感じなければならなかった痛み。すべてが無駄だった... そして、私はまだ答えを持っていない！」

フミコ 1 「人生は平等じゃない。だから、すべてクソだ。みんなクソなの。あなたは、たった一人で、ここまで成長することができた。多分、世界はあなたに必要なすべての答えを与えない。それどころか、何もかもに正解を与えない。あなたが問い続けることで、それを形作るのはあなた自身なのかもしれない。結局のところ、私たちは皆、答えを探しているのだ。」

不見子は少し落ち着いたようだ。フミコ 1 が手を差し伸べ、不見子を立ち上がらせる。

街のショット

コラージュの間、私たちはブレーヌがコートに身を包み、サングラスをかけた大きな帽子をかぶっているのを見る。男が通り過ぎるのを待っている。彼女は顔を見せない男を刺す。男は自動販売機にしがみつこうとし、ボスの顔のシンボルに血を塗りつける。男は地面に倒れ、

血を流して死ぬ。

半助のアパート

半助が植物に水をやり、いくつかの記事に目を通す。クローズアップすると、彼が何かを考え始めているのがわかる。そして仕事を中断し、アパートの掃除を始める。彼は手付かずだった押し入れから書道セットを取り出す。しばらく使っていないのは明らかだ。床に作業スペースを作り、紙に「絆」という漢字を書く。彼はその出来栄に満足そうだ。玄関のベルが鳴る。

半助のアパートの前で、昼

オリジナルの不見子がベルを鳴らす。彼女は全く違う服を着ている。冷静で自信があるように見える。半助がドアを開ける。

半助：「はい？」

不見子：「こんにちは。失礼ですが、中森半助さんですか？」

半助：「そうなんですけど。」

不見子：「お邪魔します。風間不見子と申します。今、雑誌の記事を書いているところです。このマンションに関連していくつか質問させていただいてもよろしいでしょうか？」

半助：「どのような質問でしょうか？」

不見子：「私は今、この地域に住んでいた女性の話を書いています。【…女性について取材します。】数年前、ボーイフレンドが彼女をバスタブで溺死させたんです。調べてみたところ、さまざまな手がかりからあなたのアパートにたどり着きました。死体は中で発見されましたが、ボーイフレンドは姿を消したようです。」

半助：「そんな話信じられない。本当は映画で見ただけじゃないの？」

不見子：「いいえ。実際にあったことです。」

半助：「そう、小説ですね。」

不見子：「そう、私が書いているもので、それが今日来た本当の理由です。私は、闇に葬られた被害者たち、あるいは警察が忘れてしまったような被害者たちの話をしたいと思っています。たとえ彼らがもうこの世にいないとしても。」

半助：（自分に言う）「取り憑かれているんだ…」

不見子：「はい？」

半助：「ああ、何でもない。それですべてが説明できました。今までその話は知らなかったんですけど、なんてひどいなんだ。それで、その人はどうなったんですか？」

不見子：「彼はただ、もう一人の顔のない殺人者になった。結局のところ、この方がいいのかもしれない。この男は、彼のような他の人たちが普通に受けるような注目を得るべきではないと思う。私は被害者の話が気になる。殺人犯の卑劣な行為によつてのみ記憶されるなんて。多くの命が忘れ去られ、このような非人道的な方法で奪われる。」

半助：「そうですね。僕は助けになれないけど、風間さんが彼女の話を発表するようになることを願っています。」

不見子：「私もそう願っています。いつも彼らの心境に入り込もうとしています。被害者たちのことです。殺された後もまだこの世にいて、なぜ自分が死ななければならなかったのか、何がその原因だったのかを理解しようとしていると想像します。もし彼らにもっと時間があつたなら、どれほどの可能性があつたかと。」

半助：「悲しい考えですね。」

不見子：「全然そんなことはないんです。死が終わりではないと知ること、安心感が得られるんです。」

半助：「そうですね…僕もそう思いたいです。」

不見子：「とにかく、これが私の番号です（名刺を渡す）。もし私の本に役立ちそうな情報を見つけたら、ぜひ教えてください。」

半助：「分かりました！」

不見子は立ち去ろうとしている。

半助：「あの、よかつたら中に入ってみませんか？部屋を見回せば、自分で答えが見つかるかもしれませんよ。」

不見子：（微笑んで）「大丈夫です、想像できますから。」

不見子が去ると、半助はしばらくその場に立ち尽くします。そして、シャツの前側を整え、再び部屋に戻る。カメラが濡れた場所に向かってゆっくりとペンする。

外観、路地、前の晩

半助は、別のペン屋に入った戸津谷を待っている。しばらくして、戸津谷が失望した表情で戻ってきた。

半助：「本当に見つけられるかどうかわからないよ。」

戸津谷：「いや、あったよ。」

半助：「そうなの？じゃあ、どうして買わなかったの？」

戸津谷：「だって、それは大きな嘘だから。アプアエルシエトウルーデルはウィーンのものじゃないんだ。ペン屋がそう言ってたんだよ。生地は最初にエジプトやパレスチナで作られて、ヨーロッパにはトルコを通じて来たんだ。へへへ。単なる偽の、作られた伝統さ。へへへ」

半助：「どうして笑ってるんだ？」

戸津屋：「だって面白くないか！気づかなかつたんだよ、ずっと、特定の地域の有名なペイストリーだと思って、必死になって追いかけてたのに、それが全くのウソだってわかつたんだ。もしかしたら、本当に新しい体験なんてないのかもしれない。他のことも同じかもしれない。私たちが体験したいと思うものに、自分たちで価値を与えているだけなんだ。でも実際には、すべてはフェイクで、作り物さ。くそ、今すごく気分がいい。ペン屋にならなくてよかった。」

半助は笑う。

半助：「お前がそう言うなら、そうだな。」

カメラが離れ、彼らが歩き続ける様子を映します。

半助のアパートの入口

ヘレーネは半助からプレゼントを受け取った後、アパートを出ます。彼女は一度立ち止まり、バッグの中を再び覗きます。彼女は泣きながら立ち去り、同時に無理やり笑顔を作る。

不見子：「はい、語るに値する物語もある。しかし、時には関わっていない人々から詳細を隠しておく方が良いこともある。私たちがスクリーンで見るものや、読む物語、さらには街で知ることが、私たちが抱えるすべての質問に対する答えを与えてくれるわけではないのだから。もしかしたら、私たちが共有する小さな物語にもっと注意を向ける方が良いのかもしれない。それらが私たちを絆で結んでいるのだから。」

ヘレーネは立ち止まり、バルコニーにいる幽霊の不见子彼女を見守っています。ヘレーネが振り返ると、不见子の姿は消えています。彼女は再び歩き始め、カメラから離れて道を進んでいきます。

クレジット

終わり